

「この子は大丈夫！」

ヨブ記 1 : 1 - 5

November.12.2023

(第一、第三礼拝) 今日には幼児祝福礼拝ということで、第二礼拝で幼児祝福式があります(した)。

満2歳児から満5歳児の子供たち12名が前に出て来て、名前を呼ばれた後、みんなで心を合わせ子供たちの祝福を祈る時を持ちます(した)。

第一礼拝と第三礼拝では子供たちはいませんが、祈ることは出来ますので、祈りたいと思います。私が祈りますので、心を合わせていただけますと感謝です。

祈り

### ヨブ記 1 : 1 - 5 (パワポ)

#### Preface

今朝は幼児祝福礼拝なので、いつものエペソ書ではなく、子供たちを育む・育てるということをヨブ記から考えていきたいと思えます。

ヨブ記と言いますと、ヨブの筆舌に尽くしがたい苦しみがすぐに思い浮かび、子供を育むとか、育てるとかということとは、なかなか結び付かないかもしれません。

私自身も以前は、ヨブ記に子供を育てる上でとても大切な教えがあるとは思ったこともなく、考えたこともありませんでした。

ですが、数年前の早天祈祷会の学びの中で、先程お読みしましたヨブ記 1 : 1 - 5 の御言葉に、心新たに出会ってしまいました。

以前から何度も読んだはずのヨブについての紹介文なのですが、新たな感動と共に私の心に迫ってきました。特に5節の御言葉です。

### ヨブ記 1 : 5 (パワポ)

ここに記されている、ヨブが愛する子供たちのために、いつもしていた行為が心に迫ってまいりました。

ヨブという方は、3節にありますように、ヨブ当時の社会において一番の有力者であり、最重要人物であり、権力者でもあり、大富豪でもありました。

ヨブの動向が、社会を動かしてしまうような存在です。

人々の憧れの的でもあり、目標となるような存在でもあったでしょう。

ITが世の中を動かし、莫大な財を生み出す現代社会に例えるならば、OpenAIのサム・アルトマン、グーグルのサンダー・ピチャイ、テスラのイーロン・マスク、アマゾンのジ

ェフ・ベズス、メタのマーク・ザッカバークのような存在でしょうか？

日本で言えば、長者番つけ1位のユニクロの柳井さん、2位キーエンスの滝崎さん、3位ソフトバンクの孫さんのような富豪でしょうか？

ヨブは富を手にしていただけでなく、1：1にありますように（詳細はヨブ記29章にあります）、誠実で直ぐな心を持つ神を恐れる人として、弱者に、貧しい人たちにも進んで手を差し伸べ、所有していた富を彼らのために差し出し、分かち合うような人物でもありました。

それゆえに、人々からの尊敬の念まで得ていました。

つまり、世の中で手にすることの出来るものすべてを手をしている人が、ヨブという人でした。

### Part One

そんな人の羨むものすべてを手にしていたヨブが、子供たちのためにしてあげていたことが、子供たち一人一人のために祈り、子供たち一人一人の罪のために執りなし、子供たちと一緒に主なる神様を礼拝することでした。

特に私自身感銘を受けたのは、朝早くから起きて、子供たちのために家畜を屠って献げたということです。

息子が7人、娘が3人の10人の子供たちのいけにえですから、少なくとも10頭以上の家畜を献げたということです。

家畜の屠殺をしたことのある方はあまりおられないかもしれませんが、羊や牛などの家畜を一頭、何の機械も用いずに屠るといのは大変なことです。

しかも、聖書の要求する家畜の屠り方というのは、必ず血を流さなければなりません。

モンゴルの遊牧民のように、大地に血一滴も流さない屠り方ではなく、むしろ血をたっぷり流す、血生臭い屠り方をしなければなりません。

皮をはぎ、各部位に切り分け、内臓を取り出し、薪を整え、全部燃やし尽くします。

これを10頭分もするわけですから、精根尽き果てるような大変な作業です。

子供たちを信仰へと導くために、精力、気力、体力、財力のすべてを動員して、誠心誠意、心を込めて、いつもこの信仰的作業を行っていました。

莫大な財産をどんな形で子供たちに有効的に引き継がせようか、または、その財産を引き継ぐに値する人物にするためにどのような教養教育を付けさせようか、そして、子供たちも続けて社会の有力者として生きていくためにどうすればいいのかということにいつも専心していたのではなく、子供たちが何としてでも神様に繋がることをいつも最も大事にし、そこに心を砕き、時間を献げ、私財を投資していました。

親として、大人として、いちクリスチャンとして、子をまことの神に繋ぐ、イエス・キリストに繋ぐということを何よりも大事にしていました。

「もしかすると、息子たちが罪に陥って、心の中で神を呪ったかもしれない」というヨブの

言葉に、神に繋がらないということがどれだけ深刻なことなのかを、ヨブ自身深く理解していたことを感じ取ることが出来ます。

妖精信仰に影響された幼い子供に羽の生えたようなピヨピヨ天使を思い浮かべながら、子供のことを「天使のようだ」と子供を純粹無垢な存在のように例えることがありますが、ヨブは違いました。

すべての子供たちが生まれながらにして、神のかたちに創造された良いものや能力をたくさん持っているということ以上に、それら良いものや能力をすべて打ち消してしまいかねないほどの生まれながらの罪人であり、生まれたその瞬間から罪の報酬である死に向かってカウントダウンが始まっている罪人でもあり、放っておいても上流から下流に水が流れるように至って自然に罪を犯し、自分たちの肉と心の欲のままに生きる罪の中に死んでいる者であることから、子供たちがまことの神を、イエス・キリストを信仰することへと繋ぐことをもって、神の救いに与ることを最も大事にしていました。

精神的にも、肉体的にも、霊的にも未成熟な形で生まれてくる子供たちを信仰に導くことを、ヨブは何よりも大事にしていたわけです。

## Part Two

人の作りだした物や法や組織や価値観や世界観に囲まれながら生きていますと、それらを身に付け備えさせることが、子供たちにとって幸いなことだとクリスチャンであっても当然のこのように思ってしまうがちです。

信仰は二の次、まずは世の中で評価されるものを身に付けさせることに誘惑され、それを身に付けさせることが子供を幸いにすると思わされ、思ってしまうます。

でも、私たち、本当はもう分かっているのではないのでしょうか？

「それらのことが、子供たちを幸いにすることはない」ということをです。

今の時代を嘆く言葉が巷に溢れていますが、一方でむしろ、とても良い時代に生きていますと、私自身は思ったりもします。

では、どういう面で良い時代なのか？

真理に飢え渴き、本物を渴望し、モノやコトが人の心や根幹的なものを満たすことは出来ない、魂の奥底に光を灯すことは出来ないということを悟ってしまった感のある時代という面で、良い時代だと思います。

私たちが生きている現代社会は、ある意味一巡した世界です。

物質的な貧しさを脱却し、物質的に裕福になれば幸せになると思ったけれども、そうでもない。

おいしいものをたらふく食べられれば、それ以上の幸せはないと思ったけれども、そうでもない。

みんなが出来るだけ平等に高等教育を受けられる環境を整え、高等教育を受けさえすれば幸いになると思ったけれども、そうでもない。

どんな分野でも、勉強でもスポーツでも経営でも政治でも一番になれば幸いになると思ったけれども、そうでもない。

自然を淘汰し、支配し、克服して、人間の作り出した物で満たした未来的電脳社会になれば幸いだと思ったけれども、そうでもない。

田舎から都市に出て、または田舎から脱却できる都市世界をいっぱい作り出せば幸いになると思ったけれども、そうでもない。

医療が発展すれば幸いになると思ったけれども、そうでもない。

科学技術が発展すれば幸いになると思ったけれども、そうでもない。

酒で元気づけ、肉と欲の欲する快楽に没頭し、刺激を得れば幸いになると思ったけれども、そうでもない。

音楽、演劇、ダンス、絵画、彫刻、映画、漫画などの芸術と言われるあらゆるものにいそしみ、追求すれば幸いになると思ったけれども、そうでもない。

何はともあれ一先ず、自分の好きな趣味に好きなだけ興ずることが出来れば幸いになると思ったけれども、そうでもない。

特定のイデオロギーを社会に浸透させ、新たな社会を構築していけば幸いになると思ったけれども、そうでもない。

正義と民族の平和を掲げて、戦争を起こし勝利すれば幸いになると思ったけれども、そうでもない。

まわりついていた古めかしい風習や宗教から脱却し、自分の目に正しいと思えることを突き詰めれば幸いになると思ったけれども、そうでもないという時代が、今の時代です。

人としてやれることはひとまず一通りやってしまったような、一巡してしまっような感覚が、靄がかかったように社会や世界全体を覆っている時代、それが今の時代です。

それでも、そのサイクルから抜け出すことを考えるのではなく、その靄が掛かったような中で、自分なりの光を、ライトを手にして、靄に向かってライトを向けながら、本当は見えていないんだけど、その光の先に道が見えているかのように思い、自らに思い込ませ、すで一巡して何もなかったことが分かっているところを手探りしながら進み、よく分からないけれども、それでも手元にある小さな人工的な光を見て安心しようとする時代、そして、自分で自分を慰めようとする時代、それが終末を間近にした今の世界です。

### Part Three

日本の自殺者数が長らく3万人を超え、今は2万人ほどに減ったと言われますが、この何とも言い難い痛みの状況は、イスラエルとハマスの衝突によってこれまで亡くなった1万2千人の死者数を優に超えている数です。

戦争は、日本から遠く離れた一度も行ったことのない中東世界の国で起こっている他人事のようなものではなく、この日本で、この日本には、まことの神の愛を知るのか知らないのかという霊的戦争が熾烈を極めていているような状況です。

霧がかかっているところを歩き疲れ、道に迷い、自分で自分を慰めることに限界を感じてしまっている時代、それが今の時代です。

でも、このように混沌としていることが一目瞭然で、その混沌さを肌感覚で感じる事が出来るという面で、良い時代に生きています。

なぜならば、その感覚がまことの光への渴望、霧を晴らしてくれるまことの光への切なる思いを抱く可能性を大いに秘めているからです。

宣教が進まない、信仰継承が出来ないと、教会自ら、クリスチャン自ら言ってしまうようなきらいがあるように思われますが、そんなことはありません。

今こそ、絶好の機会です。

今こそ、闇を打ち破るまことの光、人の光として来られたイエス・キリストの価値が浮き彫りになりやすい時代です。

もちろん、いつの時代にあってもイエス・キリストは光ではありますが、一巡したこの終わりの時代にあっては、それがさらに鮮明になり、露わになり、明るみに出されてしかるべき光です。

そんな中私たち大人に託されていることは、子どもたちに、私たちの信仰を口にすることです。

イエス・キリストを語ることです。

イエス・キリストを信じて歩む生々しい、ありのままの姿を見てもらうことです。

ヨブの子供たちは、世界一の有力者の父親のおかげで、貧困に苦しむこともなく、兄弟仲良く行き来し、順番に祝宴を開きながら、あたかも世界をすべて手にしていたかのような暮らしが出来ていました。

でも、ヨブは、それをもって良しとはしませんでした。

それをもって神を忘れ、罪人であることを忘れ、神をのろう者となること、神を賛美し、神に祈り、神の言葉を蓄え、神を礼拝し、神を愛し、人を愛し、人の痛みを知り赦し、共感し、分かち合うことを忘れ、自分のためだけに生き、心の赴く欲に従って生きることへの危うさを深刻に捉え、どんなに羨ましがられるような暮らしだとしても、神を中心とした生活でない生活こそ、呪いであることを子供たちに教えました。

そして、子供たちのために祈りました。

家畜10頭を子供たちのために、血まみれになりながら献げるほどに、いつも祈っていま

した。

我が家にも4人の子供たちがいますが、また、今日の幼児祝福式に出席する12名の子供たちのみならず、生まれたての赤ちゃんから、小学生、中学生、高校生、大学生、大学院生、社会人に至るまで、たくさんの子供たちが集っている教会の牧師として、このヨブの生き方・価値観・信仰に、チャレンジを受けます。

この後、ヨブの10人の子供たちは、神の御手の内で全員、突然、死を迎えることとなってしまいました。

でもヨブは、子どもたちのために、親として大人として、してあげられるべき最善、神へと繋ぐということをしていたおかげで、例えようもない悲しみはありましたが、ひと時の旅のような現生の暮らしから、遥かに良い天の故郷の神の懐に抱かれる永遠の住まいへと送ることが出来たという平安に至ることが出来ました。

その平安の思いを口にしたヨブの有名な言葉が、

**ヨブ記1：21（パワポ）**

**主は与え、主は取られる。**

**主の御名はほむべきかな。**

です。

ヨブは子供たちに、この目に見える世界で私たちの命と人生が完結するのではなく、むしろ、この世界での暮らしはひと時で、永遠があることを伝え、そこに入るための救いがあることを教えました。

この不完全で、不条理な世界で完結する命ではなく、完全で、至って理に適った、愛が体現されている世界に繋がる命があるということを知り、信じられることが、この混沌として世界を生きていく上で、子供たちの目に輝きを与えることをヨブは知っていて、教えました。

#### Part Four

以前から、「子供は村全体で育てるもので、めぐみ教会は、皆で子どもたちを育み育てるめぐみ村でもある」ということを皆で共有してきましたが、乳幼児から小学生、中高生、青年に至るまで、たくさんの全年齢層の子供たちが毎週同じ場所に集まり、同じ目的をもって、同じ時間を過ごし、互いに関係し合っているこんなコミュニティー共同体は、現代日本にあって中々珍しいことでもあり、とても貴重な財産でもあり、イエス・キリストの愛ゆえに成し得ることだと思えます。

そんなキリストのからだと称される教会の持つ大きな特徴の一つが、子供たちがいるということですが、私たち教会の原型とも言える荒野生活のイスラエルの民たちにもたくさんの子供たちがいて、その子供たちに対する教え、教育、訓戒を命じている聖書箇所がありますので、見てみたいと思います。

## 申命記 6 : 4 - 25 (パワポ)

何の本なのかは忘れてしまいましたが、子を持つあるクリスチャンの親の言葉が本に載っていたのですが、その言葉が印象深く残っています。

どんな言葉かと言いますと、「信仰は、人それぞれ自由に選択するものだから、私は自分の子供たちに信仰を伝えたり、教えたりすることはしないし、彼らが大人になって決めればよいことだと思う」という言葉です。

確かに信仰は強要できるものではありませんし、神様の恵みなので、この方のおっしゃることもそれらしく聞こえます。

でも、聖書は、「唯一の神を愛し、神の言葉を心に留めることを子供たちに良く教え込むだけでなく、子供たちの心に神の言葉が実際に刻み込まれる努力をしっかりと努めなさい」と命じています。

なぜなら、そこにこそ幸せがあるからですね。

いつまでも私たちが幸せになり、私たちが生かされるためですね。

マナ愛児園の設立目的は、所謂、良い教育・良い保育を施すためではありません。

子供たちへの信仰継承がその設立目的です。

柔らかい子供たちの心に神の言葉を植え、教え込むために、礼拝があり、暗唱聖句があり、みことばソングがあります。

そこに、良い教育・良い保育が含まれています。

良い教育・良い保育のために、礼拝や暗唱聖句や賛美があるのではなく、信仰継承という目的に、当然の結果として良い教育・良い保育が付いて来ます。

森の学園、喜楽希楽サービス、からしだねも、直接・間接の違いはあれど、信仰継承がその運営の土台となっています。

### Part Five

「Boundaries 境界線」という有名な本がありますが、その著者の Henry Cloud が他の著書でこんなことを言っています。

「健康な人とは、神様がどなたなのかを見ることが出来、その方を愛し、その方に従い、その方の下で、自分に適した役割を全うする能力を持っている人です。

そして、神様は、その能力を備えていく過程を、育児を通して始めるようご計画されました。

神様は、大人たちに、子供たちが神を覚え、神の前にあって立つべきところに立つよう育む課題をくださいました。」

さらにこんなことも言います。

「子供の教育の目的は、イエス様の品性に似ていくことです。」

すごい言葉だなあと思います。

この目的が抜け落ちているから、空しいわけです。

業績を残すとか、良い暮らしをするためにあるのが教育ではなく、“イエス様の品性に似ていくこと”が教育の目的です。

以前もお話ししましたが、産業革命以降の教育の目的は、産業に役立つ人材育成となりました。

それまで労働力として搾取されていた子供たちが、産業の機械化による大人たちの働き口の減少を防ぐために、子供たちを働かせることを禁じる法を作りました。

表向きは、「子供を守るためだ」とか言っていますが、真の目的は、大人たちの都合です。

そうして、行き場を失った子供たちのために作り出した制度が、義務教育制度です。

でも、その教育の目的は、産業に役立つ人材育成です。

合理化し、効率化し、能率を上げて、無駄を省く人材育成が目的ですので“心が伴う”なんていうまどろっこしいことは二の次ですし、その目的と合わない子や人は、排除されていきます。

現代でも、教育という名のビジネスの元、搾取され、ふるいにかけてられる子供たちが心を持っています。

でも聖書の言う教育の目的は、イエス様の品性に似ていき、神様の品性を回復することです。

「これを教育の目的と据えるならば、それ以外の良いと思われるものは、後から自然についてくる」と、聖書は約束しています。

この聖書の言葉、神の言葉を失った教育は、結局行き着くところ、空しさしか残すことが出来ません。

今、一巡した世界に生きている私たちに最も必要なのは、ヨブが為した信仰教育です。

この教育こそ、親として、大人として、子供たちに施せる最善の教育です。

### Conclusion

最後に一つだけ、私の尊敬する先輩牧師の話をさせてください。

この先輩のお父さんも牧師で、一番の名門大学を卒業し、実業家として成功を収めていたところ、40代半ばに神様の召しに従って突然事業をたたんで、神学校に行って牧師になり立派な働きをされた方でした。

この先輩のお兄ちゃんは牧師にはなりませんでしたが、受験勉強が出来て、お父さんが出た名門大学に現役で合格することが出来ました。

そして、私の先輩もついに高校3年生になり、受験が目の前に迫ってはいたものの、お父さんやお兄ちゃんのように勉強が出来たわけではありませんでしたが、それでもプレッシャーの中自分なりに勉強をしました。

でも、残念ながら大学に落ちて浪人することとなりました。



そんな我が子を心配したお父さん牧師が、がっかりして、気落ちして、ふさぎ込んで、寝込んでいるんじゃないかと、不合格の知らせを受けて一人部屋に閉じこもっていた息子の部屋の扉を開けてみたところ、泣きながら、祈りながら、神様に賛美を献げていたそうです。

その様子を見たお父さん牧師先生は、「この子は大丈夫だ！ だって、この子はイエス様にしっかり繋がっているんだから！」と、思ったそうです。

神のない教育制度にはじき出された我が子を見て、「この子は大丈夫なんだろうか？」と心配するのではなく、我が子が神に繋がっていることをもって、「この子は大丈夫だ！」と言えるこのお父さんの告白が、私たちのものでもあれば、何と幸いなんだろうかと思います。

ヨブは、10人の子供たち全員に、「この子は大丈夫だ！」と言いたくて、いつも（聖書を叩きながら）このようにしていました。

お祈りいたしましょう。

祝祷：申命記6：7